

## 社会学部付属研究所に期待すること —退任される先生方をお招きして—

参加者：橋本 茂（調査・研究部門所員 社会学科）  
吉原 功（学内学会部門所員 社会学科）  
橋本 敏雄（調査・研究部門所員 社会学科）  
浅川 達人（調査・研究部門主任 社会学科：司会）  
大瀧 敦子（相談・研究部門所員 社会福祉学科：コーディネーター）

浅川：この座談会は、研究所年報39号の特別企画として計画させていただきました。36号のときにも「これまでの研究所、これからの研究所」という座談会がありました。それと同じ趣旨の企画ですので、第2弾ということになりましょうか。今年度で退任される橋本茂先生、それから吉原功先生、橋本敏雄先生の3人にお越しいただきました。先生方お忙しい中、お時間を割いていただきましてありがとうございました。

3人の先生方は、いずれも研究所に対して深く、長いかかわりをもっておられます。そして、我々が存じ上げない初期の大規模な総合的・地域調査の経験もなさっておられます。そういった貴重な経験をぜひ年報の誌上に残していただきたいという思いから、この座談会を企画させていただきました。3名の先生方はいずれも社会学科の先生方なので、相談・研究部門の研究員である社会福祉学科の大瀧敦子先生にもお越しいただき、座談会に加わっていただくことになりました。

社会学部は2005年度に40周年を迎えたわけですが、研究所は、文学部社会学科のときに家庭福祉研究所ができて、そこから数えると今年は60周年ぐらいにあたり、非常に長い歴史があり

ます。まずは、研究所の思い出や経験をお話いただければありがたいです。

### 社会学部付属研究所の歴史と思い出

橋本（敏）：そこまで古くないですね。茂さんぐらいでしょう。

橋本（茂）：僕が明治学院大学に赴任したのは昭和43年（1968年）で、この頃から大学は紛争に巻き込まれ、研究所も大きく変わろうとしていたときであったように思います。僕は学生を終わって教師になった途端に吊るし上げられて、何が何かわからない状態で教師生活が始まりました。69年に大学は本格的な紛争に入り、まず、大学は学生によって、次には大学当局によって封鎖されるような状態になり、授業もできないような状態になりました。

橋本（敏）：僕が来たのは72年で、そのときはもう、「社会学部付属研究所」になっていました。

浅川：茂先生は郡山で行われた大規模な地域調査に参加なさったのですか？

橋本（茂）：郡山の調査には就職してすぐに参加し、続いて、君津の調査にも参加しました。調査報告も書いています。

橋本（敏）：郡山調査は、僕がまだ明学に来る

前のことです。

**吉原**：僕も来ていない。僕は70年ですけど、君津調査が始まる時かな。

**橋本（茂）**：70年ごろ、それまでの福祉学科主体の家庭福祉研究所から、学部主体の社会学部附属研究所に生まれ変わったと思います。その新しく生まれた体制のもとで、学部を挙げて、君津調査が始まったのではないのでしょうか。

**浅川**：郡山調査は、どのくらいの規模でなされたのでしょうか。また調査期間はどれくらいの長さだったのでしょうか。

**橋本（茂）**：それは研究所の最大の調査プロジェクトであったと思います。その報告書に「本誌の刊行に、4年間にわたる本学研究スタッフのチームワークを組んだ」と書いてあります。

**浅川**：それでは、君津調査には何人ぐらいのスタッフが行かれたのですか？

**吉原**：当時のスタッフはほとんど全員行きました。

**橋本（敏）**：グループに分けましたね。地域班とか福祉班とかいろいろ分かれて、それぞれのグループの班長は決まっていました。私の班は地域班で、亡くなられた川本彰先生が班長でした。

**吉原**：私の班は、三浦（恵次）先生がリーダーだったと思います。

**橋本（茂）**：地域班で、僕は地域開発のリーダーシップをとった方を訪ねてインタビューしたことを覚えています。あのような学部挙げてのプロジェクトはこしばらく無理かもしれません。

**浅川**：逆に言えば、そのころはどうしてそういう大規模な研究プロジェクトができたんでしょうね。

**橋本（茂）**：皆が従う強力なリーダーがいたからだと思います。

**橋本（敏）**：そういうこともあったかもしれませんが、自分の勝手な推測になるとは思います。

研究所としてまとまった研究成果を発表するべきじゃないかということが郡山以来あって、専門がいろいろだけれども、逆にいろいろあるのを生かして総合的な調査研究をしようということはあったと思います。館先生が所長でした。

**橋本（敏）**：郡山のときは、所長はどなたでしたか。

**橋本（茂）**：元吉先生だった。

**橋本（敏）**：君津のあと、君津ほど大勢の参加はありませんでしたが、そういうものを目指して、原田先生が中心になって丹後の調査を始めたけれども、全体としてはまともらずに終わってしまいました。それ以来ないですね。

**浅川**：その後、大規模な調査はないんですね。

**橋本（敏）**：小グループのプロジェクトに分かれていく。

**橋本（茂）**：個別的な調査ですね。

**橋本（敏）**：それもなくなって、個人の研究にプロジェクト予算を出すようになったのはいつ頃からですかね。

**吉原**：それは比較的最近というか、80年代の中ごろじゃないかな。

**橋本（茂）**：でも。そういうことができる時代もあったんだと、懐かしくなります。その人が提案すれば、皆従うというボスがいたんだね。



橋本 茂 先生

### 大規模な地域調査の実績

浅川：吉原先生は、郡山調査や君津調査にはあまり参加されていなかったのですか？

吉原：最初は君津の調査に参加しましたが、まとめる段階ではフランスに滞在していたので、書いていないんです。わけもわからずに、「とにかく来い」と言われて、君津駅までどうやっていくんだろうと時刻表を調べた記憶があります。

橋本（敏）：僕は、当時ワープロなどありませんから、手書きの調査票作成のほか、学生調査員の手配、インストラクションから旅館の手配まで、随分やらされた覚えがあります。

橋本（茂）：そこまでやってたんですか。

橋本（敏）：はい。

吉原：学生も参加したんだ。

浅川：報告書には「大学院生」と書いてありましたね。

吉原：大学院生は行ったよね。

橋本（敏）：大学院生は記憶にないから、どこかの班についていたのでしょうか。僕のところにはいませんでした。

橋本（茂）：そうなんだ。八幡製鉄の労働者とその家族が移ってきたんだね。君津に大きな団地を建てて、そこにそのまま入った。君津の町で八幡弁が主流になったという時代でした。今、新日鐵は昔の勢いがありませんが、われわれのころは、まだ溶鉱炉の火は赤々とすべて燃えていた。それがだんだん消えていくんですね。しかし、今また、すこしずつ復活しているようですね。できれば、もう一度みんなで君津を調査して、私たちの調査結果と比較したら面白いかもね。30年後の君津の予期せぬ現実を見ることになるでしょうね。

浅川：そうですね。もし、今、先生が君津に行ったら、どんなところに興味を持ちますか。

橋本（茂）：あのころは、漁業中心の小さな町

であった君津が、日本を代表する工業都市として大きく成長し、豊かになるであろうと、地域の住民も調査した私たちも楽観していたように思います。だからこそ、この30年間で、どのような現実が生まれたかを知りたいですね。また、九州から移住してきた人々がどのように君津住民へとかわっていったかをも知りたいですね。

浅川：基幹産業が斜陽になってきたという大きな社会変動の中で、住民がどう考えるのかということですね。

橋本（茂）：そう。いつまでも発展していくぐらいに思っていた。住民もそうだったと思います。

浅川：それはそうですね。

橋本（敏）：僕はそういうふうには思わなかった。これは大変なことになるなと思った。

浅川：予期しておられたんですか。

吉原：どうして八幡から君津に移ったの？

橋本（茂）：どうしてだろうね、いい港があるとか、東京に近いとかいろいろ・・・。

橋本（敏）：高度成長の後半頃から首都圏の需要が拡大し、八幡にいたのでは立地上不利だということで、東京に近いところを探しているときに、社長と関係のある人があの辺にいて、そちからアプローチしたようです。

吉原：僕は、学生時代、八幡製鉄が盛んに稼働しているときに八幡に行ったことがあります。地上は人が見える程度に明るいんですけど、とにかく空が真っ黒でびっくりしたことを覚えています。

橋本（茂）：それは昭和何年ですか。

吉原：30年代後半ですね。

橋本（茂）：まだ公害の観念が薄い時代ですよ。反対運動は？

吉原：いや、もうすごい公害だったと思うけど、騒ぐことはなかった。

橋本（茂）：やはり、なかったんですね。

吉原：まだ公害なんていうのは・・・。

浅川：概念として登場していないですね。

橋本（茂）：むしろもうもうと出る煙を誇りにしていた時代だね。

浅川：汚染はされても。

吉原：まだ貧乏ですから。東京オリンピック以降少しずつ生活が豊かになっていく。あの真っ黒な都市が千葉県にできるのかという思いで君津の町を歩きました。だけど、その後そういうふうにならないんだよね。製法が変わるわけでしょう。

橋本（敏）：八幡製鉄が新日鐵としてあそこに入ってきたときには、新しい精錬技術で、公害についてはかなり配慮されていました。明学の君津調査に入る少し前に別の調査で新日鐵の従業員の調査をした折、工場の中も見学しましたが、非常にオートメ化された工場で、ほとんど無人の状態でした。その当時は、需要が圧延という平らな鉄板と、それを管としてスパイラルに巻いていく工程が自動化されていました。

吉原：八幡がそういう状態だったのは、石炭のせいだと思います。石油へのエネルギー政策の転換があって、三井・三池炭鉱の大闘争が60年安保の直前に展開される。戦後労働運動の総決算ともいえるこの大闘争と安保闘争を押さえ込んで高度経済成長政策がはじまる。各地に公害を生みながらであるけれど問題化されたのは60年代末だった。

橋本（茂）：エネルギー源としての石炭から石油に代わったときですね。

吉原：日本の鉄鋼業はどういう状況なのかな。

橋本（敏）：かつては「鉄は国家なり」なんて言われてましたね。

吉原：当時はね。新日鐵や八幡製鉄に就職できたといったら、大威張りでしたからね。

橋本（茂）：当時、僕の友達が課長をしていました。やはり、もう一度調査してみたいですね。

浅川：そうですね。そのころ、福祉の先生たちはどういう切り口でここに入ったんでしょうか。

吉原：確か三和先生が中心でしたよね。

浅川：岩本先生は、「企業都市研究の現状と問題」という章を執筆されています。

橋本（敏）：君津市の社会福祉行政というので、三和先生が中間報告をしている。それから、君津・木更津地区における養護児童について、畠山先生が中間報告を書いています。また高野先生は、「君津市の生活保護階層」について書いている。

吉原：河合（克義）先生も「君津市における住民福祉の現状と問題点」を書いておられます。

浅川：君津調査をやって、茂先生はどうか。それが今にすごく影響しているということはあるか？

橋本（茂）：特に影響というのではない。僕は、調査はこの二つぐらいしかやっていないわけです。ただ、その後の君津にはやっぱり関心を持っています。新日鐵が斜陽化したあと、あそこに住んでいる人々がどんな状況にあるのか。建物も40年たって、狭く古くなっているし、それがどう変わっているのか。

新日鐵の勢いが落ちた頃に、千葉と東京を繋ぐ橋ができたけど、遅すぎたと思います。私たちが調査していた頃、君津市役所を中心に、横断橋建設の運動が活発に行われていました。橋の建設は時機を逸したように思います。こんな話をしているうちにいろいろなことが思い出されます。一緒に調査した先生の多くは亡くなっています。僕にとって奉職早々の調査地でもあったせいか、君津をもう1回調査してみたいですね。

浅川：そうですね。敏雄先生はいかがですか。

橋本（敏）：多分今と違うかもしれないけど、そういう意味では、先々いくつかの問題点が挙がっている。この時代は、君津に限らず、あち



こちで地域開発をして企業が進出していますが、いわゆる戦前からの企業城下町的な展開は多そうであれ少なくて、そういう展開は、君津やそのほかでもそんなには見られません。それだけに、そういうものを期待した住民の部分というのがあると思うんですけど、どうもそうはならないんじゃないかというのが、僕のそのときの思いでした。「住民の利益にもなりますよ」という入り方で、結局は住民が置き去りにされるのではないかという心配がありました。

その時、既に農地を宅地に転換したり、漁業権を放棄したりというのが、この地域の状況でした。僕らが君津調査に入った時点で、漁民は漁業権譲渡をして、せつかく得た補償金を持ち崩して、生活破壊が一部起こり始めていました。そういうことが、現在どうなっているか。

橋の問題も確かにありました。その橋ができれば、また一層豊かになるという幻想もありました。そのころは、君津や木更津がやっていたわけです。ところが実際に橋が架かったのは富津じゃないですか。橋が架かった位置もちょっとずれました。しかも架かってはみたけれど、今、ほとんど利用価値がない。そういうことがある程度見通された中で、首都圏につながる千葉の工業地帯、そこに住民たちのさまざまな思いがあったと思いますが、結局それが実現しなかった。

そういう意味では、地域開発と地方の問題点が改めて今日的な課題になっています。かけ声は「地方の時代」と言っていますが、要するに地方分権のかけ声の中で、むしろ地方が置き去りにされているという厳しい状況と、過去の経緯を結び付けたところで、何か総合的な地域研究というものがないものかと思います。

浅川：そういう意味では、もう1回行ってみるのは面白いかもしれませんね。



橋本 敏雄 先生

#### 共同研究を行うために

浅川：このときは、近代化とか都市化の最先端を走っていたような地域の変貌に対して、社会学部のスタッフみんなが関わる事ができて、社会的な見方もでき、福祉行政がどうなっているのか、福祉の事業がどうなっているのかという観点から福祉の先生たちも入ってこられました。今はどうでしょう、私たちにできますでしょうか。地域調査を福祉の先生たちと一緒にできますか。

大瀧：今、コアな福祉の領域でも、施設から地域へという流れが主流ですし、地域の高齢化問題などは、政策系の方、私のような医療・保健を専門とするものにとっても共通の関心がある領域です。それを一つの、君津だったら君津というエリアでまとめて、多角的に調査・分析していくという形ならば可能かもしれませんね。しかしそのためには、強力なリーダーシップを持ってまとめていく力が学部の中で働かないと難しいと思います。社会学科はいかがですか。

橋本（敏）：スタッフそれぞれの専門性の問題と、それをどこで緩やかにつなげるか。がっちり枠組みを合わせるのは難しいと思います。しかし、全く無関係なものを一つに合わせるのも意味のないことなので、少し緩やかにつながる

ような枠組みを設定して、だれかがやって「この指止まれ」じゃなくて、相談をしながら、研究所の主任会議というか、スタッフの先生たちがそういう話を積み上げながら、研究所としてぜひ協力してもらいたいということで呼びかけていくことが一つは必要かという気がします。

**浅川：**研究所のプロジェクトとして、例えばこういう題材があるのではないかとか、ああいう題材があるのではないかといったアイデアはありますか。さっき茂先生から、「もう1回君津をやってみたら」という話がありました。

**橋本（茂）：**地域というのは、まさに私たちのすべての欲求を満たす生活の場ですから、社会学部の先生方のそれぞれの研究関心を十分に満たしてくれると思います。私たちの出した報告書の目次を見ても、生活全体に及んでいることが分かります。一つの地方都市を選び、その全体を調査することにすれば、学部の全員の参加が可能となると思います。総合調査ですから、みんなが参加できるでしょう。

**浅川：**なるほど。吉原先生はいかがですか。

**吉原：**お二人のおっしゃったとおりだと思います。郡山とか君津が終わったあと、学部の先生たちがお互いにどういう研究をやっているのかということがわからない状況になってきていると思います。そこをどうにかできるのかわかりませんが、できれば、スタッフ同士の研究交流をする場として研究所が動いていく中で、「じゃ、こういう総合調査をやりましょうか」となるのが一番理想的だと思います。

大学の先生は忙しいから、同一の時間を取るのには難しいですが、できれば学部内の研究会を、まずはそれぞれの専門について順番にやっていく機会があるといいと思います。なかなか難しいと思います。

**橋本（敏）：**難しいですね。教員の多忙化という問題は今後もずっと付いて回るでしょう。今

も所長、主任は原則2年交代でやりますが、ある意味で、それ自体が持ち回りのような感じですね。君津調査の頃は、交代が必要ないというわけじゃないんですが、そのプロジェクトをやっている間は所長はずっと代わらなかった。ところが、「早く任期の2年が来ないか」とみんなが思っている中では、息の長い共同研究ができる仕組みが整わないと思います。

そういう意味では、学部全体で大半の人が参加して、研究所のプロジェクトをやろうとするときは、ある程度継続的にそれを進める研究所の体制が必要だということと、それに合わせてそれぞれが専門で持っている個人の研究計画をコントロールして、共同研究に時間を割いてもらうという体制を考えていく必要もあるかと思っています。

**吉原：**予算の使い方ががらっと変わったわけですね。昔こういうことをやっているときには、研究所の研究費はすべて共同研究につき込んだわけでしょう。科研費も一生懸命取ってきて、やっとこういうのができたわけですね。そういうふうにやっていく中で、ここにかかわらない人は不満を持つわけです。学部のメンバーから、「かかわらなくても、研究費は使えるように」という声が当然挙がってくるわけです。

**橋本（敏）：**こういう大きなプロジェクトがやりにくくなって、スモールグループみたいなかたちになったんです。そのときにはまだスモールグループという観念があるから、僕たちのときは、共同研究だという頭はあったけれど、気が付くと、研究所予算が個人個人に予算が行くような仕組みになってしまっていた。

そのことはいつか学内的にも上のところで「個人研究費を支給しているのに、研究所の予算を個人に回すというのは問題ではないか」という議論もあって、吉原さんが所長のときか、そのちょっと前ぐらいから、共同研究の実を少

しは上げるようにしましょうということで、プロジェクトに関する規定が整備されましたね。

**吉原**：僕が所長のころに、「かつてあったような共同研究を何とか復活できないか」とみんなに盛んに提唱して、所員会議ではそういうことになりました。それを実態として動くように一生懸命やってくれたのが、宮田先生だと思います。沖縄の前に。

**橋本（敏）**：それでも、やはりなかなかそういうふうにはなっていない。

このところ、学部スタッフのいろいろな人が利用しているというより、利用するメンバーが少し固定ぎみという現象も見て取れます。大勢の人に使ってもらおうとか、大勢の人でやろうという趣旨から言うと、個人化していくという逆の現象が出ている矛盾をどうやって克服するかということも、研究所として大きなプロジェクトをやる際には考えなければいけない問題だと思います。

**浅川**：それに向けてのアドバイスをいただきたいと思います。みんなで共同するために、総合的に見ることができるように一つの地域を取り上げるというのが茂先生のアイデアでした。みんなの問題意識を擦り合わせていくことが必要というのが吉原先生の話でありましたし、敏雄先生からは、研究所の制度や体制を作っていくことが必要だというアドバイスをいただきました。例えばテーマとして、「社会学部付属研究所がこんなことをやっているんだ」というふうに外に向けて発信していくときに、こんなテーマを取り上げたらいいのではないかというテーマみたいなもので、何かアドバイスをいただくことはできないでしょうか。

先ほどは、「みんながいろいろなテーマを持っているから、総合的にやればいいんだ」とおっしゃいましたが、その発想を変えて、逆に研究としてこんなテーマで売り出していったら、明

学としては面白いんじゃないかみたいなことはありますか。

**橋本（敏）**：以前から自己点検・評価の「学部の理念」というところで、繰り返し書かれてきたのは、「社会的に弱い立場の人のために」というところに社会学部創設の重要な理念があり、そのために社会学科があり、福祉学科があるということだったと思います。

明学の社会学部付属研究所の在り方としては、どのようなテーマであれ、そういうものを軸に押し出していけば筋が通っていくのではないのでしょうか。

逆から言うと、今の日本の社会状況はまさにそのような視点が改めて求められる時代に入ったのではないかとも思います。政治の乱れもあり、福祉や医療の破壊など民生にかかわる部分がいろいろと弱ってきている。しかも地域というレベルでそれが相当重い足かせとして現象している。

そういう意味では、60年代・70年代の高度成長とその後の停滞の時期の地域研究と、また違う現代的な地域研究の意義が出てきたのではないかと思うわけです。福祉の先生も一緒に考えていただけるかと思います。

**浅川**：なるほど。吉原先生はいかがですか。

**吉原**：賛成です。地域で言うと、もちろん郡山とか君津もいい案だと思いますが、もう一つ地元である港区というのはいったいどういう地区なのだろうかということを、今の視点も入れながら考えてみてはいかがでしょう。70年代・80年代と今と比べたら、激変したと思うんです。まるで様相を異にした地域になっていて、地域社会が成り立っているのかどうかわからない状況になっていると思います。

港区も最近は随分熱心になってきたようですので、タイアップしてできるのではないかという気がします。港区の調査を個人的にやってい

る先生もいます。

浅川：そうですね。福祉の先生たちはいろいろやっていますよね。

大瀧：河合先生が、独り暮らしの高齢者の調査をなさっています。

橋本（敏）：ソーシャルワークの実践もありますね。

大瀧：相談・研究部門では港区の社会福祉協議会とタイアップして事業を行ったり、子育て中のお母さんたちのサークル支援を行うなど、前よりはかなり地域とのつながりが深くなってきています。

吉原：そういうのをベースにしなが、可能な状況になってきているかもしれないですね。

浅川：そうですね。茂先生、いかがですか。

橋本（茂）：こうやって見ると、それなりに研究所は、地域研究にしてもいいものを出しているという気がする。それがこの研究所から出ているということは、その伝統を生かしていったほうがいい。弱者が一つの地域の中でどういうプロセスの中で出てきているか。君津の中にもいろいろ出てきていると思う。

産業の変化と弱者の現れと、それに対する福祉の問題を総合的にとらえて。明治学院の社会学部はそれを担えるだけの人をそろえているという利点を生かして、地方都市の研究の伝統も生かして出したほうがいいという気がする。

### 社会学部附属研究所に対する期待

浅川：最後に、今後の社会学部附属研究所に期待することをおっしゃっていただけますでしょうか。

橋本（茂）：明学の社会学部のいいところは、いろいろな分野をカバーしているところです。その利点を生かすためのプロジェクトを提案できるところが附属研究所だと思います。社会学部の利点を生かせるようなプロジェクトを立案



吉原 功 先生

できる附属研究所であってほしいと思います。

浅川：敏雄先生、いかがですか。

橋本（敏）：今後の方向ということでそういうものができてくれればいいという期待はほとんど茂さんと同じです。しかし、それだけにそれは大変難しいだろうという部分も含めて、全体的な共通テーマをどのように設定していくかということが気になります。

浅川：社会問題や、社会的に弱い立場の人たちのために、みんなで共同できればということでしょうかね。

吉原：私は別の観点からです。昨年学内学会の主任をやった経験からですが、学内学会の学生部門が活発に活動すると、学部の学生たちが元気になるような気がするんです。学内学会はこの研究所の一部門として認められているのですが、学部スタッフの先生たちの学内学会に対する理解が十分ではない気がします。学内学会の意義を学部で再確認し、その活動をもう少し活発にするにはどうしたらいいのかを検討していただけたらいいな、と思います。

清水先生が学内学会の主任だったときに、どういう方法を使ったかわかりませんが、学生さんが20名ほど学生委員となってくれて、大変幸福なことに、その学生たちが大活躍するときに、



## 座談会「社会学部付属研究所に期待すること」

僕が主任になったんです。かれらは、ものすごく活発で、いい活動ができたと思います。

先生たちとの齟齬があったりして、私の責任もあるんですけども、学内学会は別物というか、「正式の組織ではないんでしょう」みたいな雰囲気もあるように聞いていますので、そこら辺をもう少しうまくやってもらおうと、もっと学部が盛り上がっていくのではないかと。

浅川：わかりました。本日、約2時間話をさせていただきました。最初に、社会学部付属研究所の設立の歴史と、その中で行われてきた大規模な地域調査の実績についてお話をいただきました。そのような共同研究をやっていくにあたって、どんなことが考えられるのかといったアドバイスをいただきました。その中には、地域研究をやるとか、こういうテーマがいいのではないだろうかということも含まれます。最後に



先生方

「この社付研を大事にしてほしい」という先生方の熱い思いを語っていただきました。今日は、お忙しい中、本当にありがとうございました。